



千葉労働動向

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)

電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番
(公) 043 (222) 7207 番

78. 7. 17 No. 4819

千葉水戸秋田への三役送り込み 見さかき無しの革マル支配

「役員出向」?

7月12日、13日にかけて、JR東労組千葉地本大会が開催されたが、前代未聞の役員人事が行われた。千葉とは縁もゆかりもない、高崎地本所属の小林克也(四〇歳)が、斎藤吉司をおしのけて専従書記長に就任したのである。言うまでもなくゴリゴリの革マル分子だ。

6月に開催された東労組本部大会で、あらかじめ本部中執に選出し、「本部からの役員派遣」と称して送り込んだのである。千葉を革マル直轄支配のもとに置こうという意図だ。

組合じゃない!

このような人事は何よりも、JR東労組の組織的危機の深刻さを示すものであり、また東労組の運動が、労働組合運動と呼ばれるようなものではないことを示している。

●革マル直轄支配の千葉

本来、労働組合の地方組織は、それぞれの特状に合った独自性を持ち、闊達な運動ができなければいけないはずだ。地方組織は、決して本部の出先機関であってはならない。また組合役員は、第一の仕事が、現場の声を汲み上げ、それを要求や運動に組織し、現場と一体となって団結と組織を強化していくことである以上、専従書記長が、他地本から見ず知らずの人間を送り込まなければならないような理由は何ひとつあるはずがない。本

来ならこんなことは絶対にあり得ない話だ。

●地本役員を「無能」扱い

しかも、これまでの地本の三役・執行委員にして見れば、本部から「お前は無能だ、信用がおけない」と言われているに等しいことだ。普通ならば、地方にとつては絶対に認めることのできない性格のものである。

さらに、東労組千葉地本の専従役員は、六人のうち四人が、国鉄当時わずか百人に満たなかった旧本部勤務で占められている。しかも、そのうち三人は、他地本からの革マル送り込み分子だ。今回の小林が高崎地本、副委員長長の長谷川と執行委員の川又が東京からの送り込みである。会社との結託体制を背景にして、ごくひと握りが三八〇〇名の組合員を牛耳るような組織は、断じて労働組合と呼ぶことはできない。

水戸と秋田でも

しかも、今回のような人事は千葉だけではなく。水戸地本、秋田地本に対しても同じことが行われている。千葉、水戸、秋田と言え、動労時代から労運研主導で、革マル支配がきわめて弱かった地方本部だ。

●水戸では三役中二人

とくに水戸地本の人事など、あまりに異常である。委員長に新潟地本所属の竹内巧、副委員長に東京地本所属の村上馨が送り込まれたのだ。委員長、委員長と三役のうち二人がよそ者に

すげ替えられたのである。竹内も村上もかつて、動労千葉の組織破壊の急先鋒にたった革マル分子だ。また秋田には、委員長ポストに盛岡地本所属の田中栄三郎が送り込まれている。

こんなことをする組織が長つづきしないことは明らかである。今こそJR東労組革マル結託体制を打倒しよう。

なぜこんな事が

それにしても、なぜこんな常識外れの人事が行われたのだろうか。考えられるのは次の理由しかない。

●切捨てに怯え監視強化

ひとつは、松崎が「資本による革マル切り捨て」が早晩始まると判断し、革マル支配のせい弱な地方に対しては、なり振りかまわぬ支配をする以外にないと考えたということだ。これには、自らの組合員と会社双方に対する監視の強化という意味が含まれていることは間違いない。まさに、ナチスのゲシュタポ支配と同じである。

●国労解体運動の体制か

もうひとつは、一昨年大失敗に終わった「国労の最後の解体運動」をもう一度仕掛けようと

考えており、そのための体制づくりではないのかということだ。結局はこれも、国労を潰さないかぎり、革マルは資本の懐で生き残ることはできないと考えているという意味では、第一の理由と同根と言える。

しかし、走狗煮らる状態になったときは、こんなことが通用するはずもなく、また今さら国労への解体攻撃が功を奏するはずもない。いずれにしてもJR東労組は、深刻な組織的危機にたつているということだ。そうでなければあえてこんな人事をするなど絶対にあり得ないことである。

●疑心暗鬼の固まり

またこれは、資本に取り入って、その力だけをバックにして組合員を支配してきたJR東労組の必然的な末路にはかならない。自らの力で自立していない以上、組合員に対しても会社に対して、つねに戦々競々として、疑心暗鬼と猜疑心の固まりになって、恐怖と憎悪に取り憑かれて生きるしかなくなるものだ。今の松崎の心境はまさにそのよなものであろう。

東労組の組合員に訴える。今こそ東労組の革マル支配と決別しよう。

○九八年團結地引き綱大会○

○七月二十日(月) 九時集合

○一松海岸—海の家・あいの